

体 育 科

島 貫 由 郷
出 嶋 志津子
山 下 裕 佳

1 体育科における「よりよい未来を志向する子」

運動は生活に潤いや活力を与えてくれる。汗を流す爽快感や目標をもって仲間と打ち込む一体感、目標を成し遂げたときの達成感など、運動を通して経験できるものがある。また、運動やスポーツを行い、様々な国の人々や多様な人々と協働したり競い合ったりすることで、交流を深め、自らの生き方を育てていくこともできる。しかし、子どもの生活環境、生活スタイルの変化に伴い、運動する子どもとそうではない子どもの二極化傾向がみられ、どの子どもも運動に親しむことが難しいことや基本的な体の使い方がうまくできないことなど、様々な課題をかかえている。

新学習指導要領において体育科では、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力」の育成を重視している。そのために体育の見方・考え方である「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適正に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかかわり方と関連付ける」ことを授業に取り入れていくことが重要となる。

そこで本校体育科では、そのような資質・能力を育むために、子どもが各種の運動の特性を理解し、その魅力にふれることで、自ら目的意識をもって学習に取り組めるようにしていく。そして、その特性に応じた基本的な技能を身に付けるとともに、習得した技能を活用して課題を解決したり、学習したことを相手にわかりやすく伝えたりして、運動と多様なかかわり方ができるようにしていく。学習の最後には学びの過程を自覚させることで、運動を行う楽しさや喜びを味わわせることをめざす。このような学習を行っていくことで、運動やスポーツとの多様なかかわり方を知り、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子どもを育成できるであろう。

以上のことから、体育科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 運動の特性を理解し 目的意識をもって学び続ける子
- ・ 運動を試しながら 友達と思いや考えを伝え 共有し 運動やスポーツの特性に合わせた動きを考える子
- ・ 運動やスポーツの楽しさを自覚し 生涯にわたって運動やスポーツに親しむ子

2 体育科における決める授業デザイン

体育科において、その運動に応じた基本的な技能及び知識を身に付け、運動が「わかった」「できた」という達成感や満足感を味わうことは、運動に主体的に取り組む上で欠かせないことである。そのために、単元の導入時に運動の特性を踏まえた子どもの実態に合う教材と出会わせ、子どもが「できた」という経験をすることで、「もっとやってみたい」という意欲を高め、「こんなことができるようになりたい」という目的意識をもつ（決める）ことができるようにする。目的が決まれば、そこに向かう道筋を見通すことができ、運動を試しながら課題を解決していくことができる。そして、課題が解決できたかを考え、また新たに課題を決めるといった学習につながっていく。このような学習過程をくり返すことで、運動に主体的にかかわり、学び続けることができる。

子どもが課題を決めると、課題解決に向かって、様々な動きを試す。そして、試した動きの中から、運動の特性に応じた動きかどうかを考え、めざす動きを共有していく。そのようにして、全体で見つけた動きの中から、自分に適した動きはどれかを考えたり、試したりすることで、自分の課題に適した動きを選択する（決める）ことができる。しかし、そのときに一人で

は一面的なものの考え方しかできず、自分の動きを把握できなかつたり、課題を解決できなかつたりするときもある。自分の課題に適した動きをよりよく選択するときには、「できる」と「できない」の間にある違いは何か、その原因・課題を見つけ、解決するためには何をすればよいのかを明らかにしなければならぬ。そのためには、友達と話し合う場や見合う場を設定し、思いや考えを伝え合わせることで、子どもは見方・考え方を広げ、自分に適した動きを選ぶことができる。

このような学習をくり返していく過程で、どのように決めて、その結果、何が得られたのか考える場面を設定し、子どもが学びを自覚できるようにする。もし思い通りの結果が得られなかった場合でも、なぜうまくいかなかったのか考えたり、うまくいった友達の考えを理解したりすることで、次の学びへの原動力となるであろう。このように、自分の学び方をふり返り、学びの広がりや深まりを見いだすことで、次の学びへと向かうことができる。また、学習の中で、運動との多様なかかわりを経験し、その楽しみも見いだししていくことだろう。これらの経験を積み重ねていくことで、自分なりの運動とのかかわり方を決めることができ、運動への親しみが生まれる。こうして、体育科における「よりよい未来を志向する子」が育まれていく。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

教材と出会ったときに各種の運動の特性にふれ、「楽しいな」「もっとやりたいな」と思わせることができるか、少し先の自分を想像させて「こんなことができるようになりたいな」という願いや目標をもたせることができるかが重要になる。そのためには、教材との出会わせ方を工夫することが必要である。例えば、教材との出会わせ方の工夫として、ルール・規則を簡易化したゲームにする。子どもの運動技能や経験には差があるため、全ての子どもが「自分にもできそう」「やってみよう」と意欲を高められるような教材を準備する。また、ねらっている動きを引き出せるような場を設定したり、今まで知らなかった視点や知識を与えたりする。そうすることで、今までできなかったような運動や経験したことがないような運動ができ、意外な楽しさに気が付くこともあるだろう。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもは夢中になれる運動と出会ったとき、「この動きはどうか」と動きを決め、試す。その試した動きの中から、運動の特性に合った動きを見つけ、共有していき、そして、その中から、自分の課題に適した動きを行っている子どもを紹介し、なぜこの動きにしたのか、決めた根拠を明確にする。そうすると、友達の多様な考えにふれることができ、新しい動きを見つけたり、新たな視点をもったりして動きを決めることができるだろう。さらに、友達と動きを見合い、よい動きや不十分なところを考えたり伝え合ったりすることで、自分の動きをもう一度とらえ直す機会が生まれる。そのときに、考えや伝えることを共有できるように、運動の特性や大切な動きのポイントなど基礎知識を与えたり、見る視点を明らかにしたりする。

(3) 今までの学びをふりかえり 未来に役立てる「決める」

学習の終わりには、ふりかえりの時間を設ける。まずは、自分が決めたことで、課題が達成できたのか、できなかったのかをふり返らせる。そして、なぜそのような結果になったのか、学習の過程を分析できるようにふり返る視点（友達に教えてもらったのか、友達の真似をしたのか、ICTを使ったのかなど）を与える。そうすることで、「次の学習ではこのように学びたい」や「次はこのようにやってみよう」という思いをもたせる。

さらに、運動の多様なかかわり方として、運動をすることの楽しさや見ることの楽しさ、支えることの楽しさ、知ることの楽しさなどを経験させる。そして、それらのかかわり方を自覚させるために、四つの視点を与えてふり返らせたり、よいかかわり方をしている瞬間をとらえて教師が価値付けたりする。そうして、自分なりの運動とのかかわり方を決め、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ素地を育みたい。